

平成二十七年聖ドミニコ学園中学校入学試験（第二回）

# 国語

◎ 次の注意事項を読んでください。

- 1 試験開始のチャイムが鳴るまで開いてはいけません。
- 2 問題はぜんぶで8ページあります。
- 3 解答用紙は問題用紙にはさんであります。
- 4 解答用紙に受験番号、氏名を書いてください。
- 5 答えはすべて解答用紙に書いてください。
- 6 字数は、句読点や「」をすべて一字に数えます。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私はよく山に行きます。そこで林業にかかわる人の話を聞きます。山をいい状態に保つには、間伐など適切な手入れをする必要があります。ところが、それができる目や腕を持つ人はほとんど①へっついている。どの木を切り、どの木を残すか。あと何年すれば、木がどうなっているか。それを見る目を持つ人がいなくなっているのです。

林業の②ゲンバでは、いろいろな面白い話が聞けます。A 高知県では木を残す際には、三本単位にするのだそうです。なぜか。

高知県は台風が多い土地です。台風で木が倒れないようにするには、一本に当たる風を弱める必要がある。三本ひとまとめにしていると、どこから風が吹いても、どれかが風上に位置することになって、全体への風が弱まるそうです。三本が一っしょに立っているから、木が、そして森林全体が保たれる。三本がいれば共生していることが強みにつながっているわけです。

これが何を③シメしているかを考えていただきたいのです。

あちこちで④シヨクリンされたので、杉だらけの山が増えてしまいました。本当の山はああいいう姿ではありません。本来は、さまざまな広葉樹の間に杉が立っているというのが、天然の山の姿です。そういう山は色とりどりで、とてもきれいです。B 赤、緑、黄色が散らばっていて、パッチワークのようです。

いろいろな木があり、その下にはいろいろな生きものがある。それは、そのほうがお互いにとって⑤都合がいいからです。それで山全体が保っているのです。

人間の都合で木を一本切れば、その下にある土の状態が変わる。また隣にある木への風や日当たりも変わる。すべてが影響しあっ

ています。

C シロアリは木材を食べます。ところが実は、木材のセルロースを分解できる酵素を持つ生物はほとんどいません。⑥レイガイ的にカタツムリは持っていますが、シロアリは持っていない。

なぜシロアリは木材を食べることができるのか。それは胃の中セルロースを分解できるアメーバを持っているからです。これがないから、木材を消化できる。それで人間に迷惑がられる。

面白い⑦ジツケンがあります。このアメーバはシロアリよりも熱に弱いことがわかっていて、温度を上げていくと、アメーバだけが死んで、シロアリは生きているという状態になる。ところが、そうになると食べた木材を消化できなくなるので、結局すぐにシロアリも死んでしまうのです。

こうなると、シロアリとアメーバは別の生きものと言えるのでしょうか。運命共同体と考えるのが自然でしょう。

体内に別のものを持っているのは珍しいことでも何でもありません。人間のお腹の中には、六〇兆とも一〇〇兆ともいわれる数の細菌がいます。昔、顕微鏡を作ったオランダのレーウエンフックという学者は、自分の歯の間をそれで見えて仰天したそうです。

駅のエスカレーターベルトには「除菌」と書かれています。①、それに乗っている私たちの体内にはとんでもない数の菌が住み着いている。すでに菌と共生しているのです。

だんだん話がつながってきました。

こういう状態——共生といってもいいし、一心同体とか運命共同体といっても⑧カマイません——が、自然の本来の姿である。そう考えると、D 個性を持って、確固とした「自分」を確立して、独立して生きる、などといった考え方が、実はまったく現実味のないも

のだと考えられるのではないでしょう。E 生物の本質から離れて  
いるのは明らかです。

かつてアームストロング船長が月に行きました。月面は真空な  
に、活動できたのは宇宙服を着ていたからです。2、その宇宙  
服とアームストロング船長の間には何があったか。それがなければ  
船長は即死です。

これはアームバとシロアリの関係と同じことです。

3、地球の環境と私たちの関係はそういうものなのです。

「環境が大事だ」ということに F 異を唱える人はいいでしょう。  
でも、どれだけの人が、環境と私たちは一心同体、同じものだと  
いう点に思い至っているか。本気でそう思うことができているか。

どこかで「自分は自分」「人間は人間」「環境は外にあるもの」  
と思っていないでしょうか。そういう人が増えたのは、ルネサンス  
以降の「個人」中心の考え方が幅をきかせてきたからです。「自分」  
を周囲から独立した存在として立てて、関係を切っていく。周りは  
全部異物ですから、つまるところはマイナスです。

仏教をひいきするわけではありませんが、こうした点については  
より自然な考え方をしています。さまざまなものとのつながりを  
⑩ ジュウヨウシしているからこそ、「縁」という発想が出てくる。

これまで私は、よくブータンに行った時の話を紹介してきました。  
た。『死の壁』(新潮新書)にも書きました。食堂で、私の飲み物に  
ハエが入ってきた。現地の人はそのをつまんで、助け出してやった  
あとに、こちらに向かって、「お前のじいさんだったかもしれない  
からな」と笑った。

ブータンには、お互いがつながりあっているという教えが生きて  
いるのです。

もちろん、本当にハエが私のじいさんのはずがありません。そう  
いうことをあまり大真面目に本気で信じ込むと、それはそれで弊害  
があるかもしれません。

でも、G そういう考え方を持っていることには意味があるのです。

(養老孟司『自分の壁』による。)

問一 線部①「へ(つて)」、②「ゲンバ」、③「シメ(して)」、

④「シヨクリン」、⑤「都合」、⑥「レイガイ」、⑦「ジツケ  
ン」、⑧「カマ(い)」、⑨「至(つて)」、⑩「ジュウヨウシ」  
のカタカナは漢字に直し、漢字は読み方をひらがなで答えな  
さい。

問二 1 3 に入る最も適切な言葉を、次のアウオの中か

らそれぞれ選び、記号で答えなさい(同じ記号をくり返し使  
うことはできません)。

ア だから イ でも ウ また  
エ つまり オ では

問三 線A「高知県では木を残す際には、三本単位にする」と

ありますが、何のためにそうするのですか。次の文の I、  
II に入る最も適切な言葉を、本文中から指定された字数  
でぬき出して答えを完成させなさい。

一本に当たる I (5字) ことよって、

台風で II (9字) するため。

問四

——線B「赤、緑、黄色が散らばっていて、パッチワークのようです」はどんな様子をたどえていますか。解答欄の「様子。」に続くように、本文中から18字でぬき出しなさい。

問五

——線C「シロアリは木材を食べます」とありますが、どうして木材を食べられるのですか。その理由を27字で説明した部分を本文中から探し、最初と最後の5字を答えなさい。

問六

——線D「個性を持つて、確固とした『自分』を確立して、独立して生きる」と、ほぼ同じことを言っている一文を、これより後の本文中から探し、最初の5字を答えなさい。

問七

——線E「生物の本質」を表す言葉を、本文中から2字でぬき出しなさい。

問八

——線F「異を唱える」の意味を答えなさい。

問九

——線G「そういう考え方」の指す内容を、解答欄の「考え方」に続くように、本文中から16字でぬき出しなさい。

問十

次の文は、本文中のどこかの形式段落の最後に入ります。入る直前の7字を答えなさい。

あまりにおびただしい数の生きものが動き回っていたからです。

□

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学校六年生の太輔は、事故で両親を亡くし、同い年の淳也や、その妹の麻利、太輔の一歳下の美保子、六歳上の佐緒里といっしょに、児童養護施設「青葉おひさまの家」で共同生活をしている。

「……四年生んときのこと、覚えとる？」

淳也の小さな声をちやんと聞き取るために、太輔はブランコをこぐことをやめた。触れ幅が少しずつ小さくなっていく。

「リレーの選手決めで、太輔くん、長谷川くんに勝ったやん」

「ああ」

太輔は足が速い。四年生までは、淳也とも長谷川とも同じクラスだった。そして、リレーの選手を決めるための体育の授業で、太輔は長谷川に勝った。長谷川はそれまでずっと、クラスで一番だった。

「あんとき、ぼく、すかっとしたんよ。なんか、めっちゃうれしかった」

A それ以来、長谷川は、太輔たちにちよっかいをかけてこなくなつた。決して仲良くなつたわけではないけれど、太輔と淳也を、

まままでのように教室で一番弱い者としては扱わなくなつた。

「太輔くんは、背も伸びて、足も速くて、うらやましいわ」

そっか、と太輔がつぶやいたとき、ブランコの揺れが止まった。

「麻利、クラスの子たちに、嫌われとるんかな」

「え？」

突然の淳也の言葉に、太輔は戸惑う。

思わずブランコから立ち上がる。なんだか、淳也の隣に座って  
いられなかった。

「……全校練習のあと、クラスのいろんな子たちの旗、押しつけら  
れとった」

だけど、立ち上がったところで、他に行く場所もない。

「なんであいつが学級委員なんやろって、太輔くんも今日思ったや  
ろ。ぼくも思った。そしたらあの背の高い女の子が言っとった、麻利  
ちゃんを学級委員に推薦してよかった、って」

淳也は、スニーカーの爪先で（１）地面を掘っている。

「旗の①カタヅけなんて、学級委員の仕事やない」

「考えすぎだって」

結局太輔はまた、ブランコに座る。今度は、淳也から離れては  
いけないような気がした。

「それに、朱音ちゃん以外のクラスの子たち、背え、大きかったや  
ろ」

「……そうだったかな」太輔はよく覚えていない。

「背の順で並ぶと、麻利が一番前のほうで、あの子たちは、一番後  
ろのほうや」

「ごくん、と淳也は唾を飲んだ。

「それも、ぼくと長谷川くんに似とる」

「そんなの関係ないだろ」

太輔は思わず淳也の顔を見た。

「たしかに関係ないかもしれんけど、関係あるかもしれん」

突然立ち上がったかと思うと、淳也は大きなジャングルジムに  
向かって歩き出した。ズボンのおしりの部分がしわくちやになって  
いる。

「太輔くん、なんか、もやもやすることあった？」  
え、と、思わず声が漏れる。

「なんか、そんな気がしたんよ」

「よしよ、よしよ、と淳也がジャングルジムを登っていく。

「このてっぺんでぼーっとするとな、もやもや、ちよつとスッキリ  
するんやで」

知っとった？ と、淳也がこちらを振り返った。

淳也には言えない。ブランコから立ち上がりながら、太輔はそ  
う思った。

（その夜、太輔たち五人は消灯後に一つのベッドに集まり、お  
菓子を食べながら話をした。）

小さなひとつのベッドの上に、五人が集まっていられる。いま、  
この部屋の電気を消してしまえば、この場所が世界のすべてになる  
ような気がした。

「ていうか、佐緒里ちゃん、きょうは勉強しなくていいの？ 勉強  
しないと、亜里沙ちゃんみたいなひとり暮らしだってできないじゃ  
ん」

雑誌を（２）めくりながら、美保子が言った。確かに、運動  
会前日だからといって、佐緒里がこうやって太輔たちと夜を一緒に  
過ごしているのは珍しいことだ。

「実はね、模試で、A判定だったの。先生にも褒められたし、ちよ  
つと今日は休憩」

佐緒里は、「もう一個だけ」と一口チョコレートを手取る。

「A判定って？」

思わず太輔は聞く。飴がもう残っていない口は、すんなりと開いてしまった。

「合格率八十パーセント以上ってこと」なぜか美保子が答える。

「佐緒里ちゃんはこのまま順調にいけば、ちゃあんと、夢、叶えられるってことよ」

「夢って？」

オウム返しを繰り返す太輔に、はあ、と美保子がため息をついた。

「そんなの、**X**に決まってんじゃない。東京でひとり暮らしして、自分のやりたいことやって。ね？」

「そうなの？」

太輔は、美保子ではなく、佐緒里自身の口で、ちゃんと答えてほしかった。そうだなあ、と視線を②オヨがせたあと、佐緒里はぼつんとつぶやいた。

「亜里沙ちゃんみたいになれたら、それは確かに夢みたいだな」  
何かで口を塞ぎたい。太輔は飴を探す。

一度気になってしまったら、もうダメだった。

もう少し前だったら、夜中にトイレに行きたくなつたとしても、朝まで我慢した。消灯時間を過ぎると廊下の電気まで消えてしまうから、トイレに行くまでに越えなければならぬ③シレンが多すぎた。

太輔は意を決してがぼつと起き上がり、二段ベッドから降りた。さつきまでみんなで集まっていた下の段のベッドでは、淳也がうつ伏せで寝ている。

裸足の足が、冷たい床に触れて気持ちいい。自然とかかどが上がる。

すうすうと、みんなの寝息が部屋の中を行ったり来たりしている。

天井の電灯から伸びるヒモを二回引つ張って、豆電球をつける。部屋の中が、濃いオレンジ色になる。

太輔はかかとを上げたまま(3)移動し、佐緒里の机の前に立った。佐緒里が中学生のときからずっと使っているくたくたのかばんから、何冊か、テキストがこぼれ出ている。

小学校の教科書と違って、表紙も、中身も、華やかではない。太輔が今使っている教科書から、カエルやチョウチョがたくさん写っているカラーページなどを除くと、こういうシンプルなものだけが残るのかもしれない。

みんな、わかっているのだろうか。太輔は、暗い部屋の中でほかに光るテキストや参考書の表紙を見つめた。

合格率八十パーセントってことは、佐緒里がずっとずっと遠くへ行ってしまう確率も、八十パーセントってことだ。④Yそ

れくらの④疑いのなさで、佐緒里は離れていってしまう。それこそ香田亜里沙みたいに、写真とか、そういう実物でないものですか、会えなくなってしまう。

ぎゅつと、ポケットの中の拳を握りしめる。汗ばんだてのひらに、黒蜜の味がする飴の丸がびつたりとくつつく。

何か口に含んでいないと、⑤ヨケイなことを言ってしまうそうだった。みんなが佐緒里のA判定を褒めるたびに、口が(4)した。こぼれ出そうになる言葉を飲み込むためには、飴やチョコレトが必要だった。

佐緒里がうれしそうに⑥ショウライの話をするたびに、胸の中がガリガリと削られていくような思いがした。

佐緒里の夢は、**X**。つまり、ここから離れていくこと。

太輔は、佐緒里の机の上の参考書やテキストのいくつかを手に取った。

「あ、おう」

「あれ」

太輔は、持っていた参考書を慌てて引き出しの中に隠した。

「太輔くん、起きてたん？」

振り返ると、パジャマ姿の麻利がドアのそばに立っていた。ドアが開いた音、引き出しを閉めた音、そして自分の心臓の音。誰かが起きてしまうのではないかと、**Z**になる。

「あ、おう」

「トイレ？」

麻利の背後に**⑧**延びている廊下の電気が点いている。「うちもトイレ。お菓子食べただけでジュース飲んでへんのかな」すつきりすつきりーと、鼻歌を歌いながら麻利は小部屋のドアを開ける。

「麻利」

思わず、呼び止めてしまった。

「ん？」

麻利が大きな目でこちらを見ている。B 淳**⑨**はきつと聞かない。だつたら、誰かが**⑨**かわりに聞くしかない。

「麻利、あのさ」

「……太輔くんってさあ」

言葉に詰まっていると、麻利のほうが口を開いた。

「C お姉ちゃんのジュケン、うまくいってほしくないん？」

「はっ？」

ぶわっと、脇の下から汗が噴き出した。一班のみんなが寝ている

ふりをしていてるだけで、本当はこの会話が聞かれているんじゃないかと、**Z**になる。

「そんなわけねえだろ」麻利の目を見ることができない。「受かってほしいって思ってるに決まってるじゃん」

「ふうん」

麻利は納得していない様子で、濡れたてのひらをパジャマに擦りつけている。

「D なんか、あんまり喜んどうらんように見えたから。A ハンテイ？

の話しとるとき」

麻利は疑いの表情を消さないまま、「あ、ろうかの電気消しといてねん」と自分のベッドに戻ろうとする。

「あ、待って」

ちよつとストップ、と、太輔は麻利の肩を掴んだ。あんなにも細い淳也の肩よりも、その妹の肩は、もつと、ずつと細かった。

「最近、朱音ちゃん、遊びに来ねえな」

肩を掴んだまま、太輔は言った。

「……前はけっこう来てただろ、ほら、ピアノ弾いたりして」

思わず、声が小さくなる。何に負けたのかはわからないけれど、

太輔は麻利の肩からパツとその手を離れた。

「太輔くん」

麻利は、ニツと笑った。

「うち、朱音ちゃんのこと、大好きなんよ」

豆電球だけが頼りの暗闇の中で、麻利の白い歯はピカッと光った。

「麻利」

太輔は、もうひとつだけ聞こうと思った。きつと、聞きたくてたまらないはずなのに、あの頼りない兄が**⑩**ゼツタイに聞けないこと。



問七

——線B「淳じゆんやはきつと聞かない」とありますが、どうい  
うことを聞かないのですか。次の文のI、IIに入る  
最も適切な言葉を3〜4ページの本文中から探し、指定され  
た字数でぬき出して答えを完成させなさい。

麻利まりが I (7字) に II (3字) ているのではない  
かということ。

問八

——線C「お姉ちゃんのジューケン、うまく行ってほしくない  
ん?」、——線D「なんか、あんまり喜んどうらんように見え  
たから。Aハンテイ?の話しとるとき」で、カタカナが使  
われている理由として、最も適切なものを次から一つ選び、  
記号で答えなさい。

ア 佐緒里さおりのが取り組んでいる受験勉強の大変さや、A判定を取る

ことの難しさを強調して表現するため。

イ 佐緒里さおりのがA判定を取って得意になっていることに対し、麻利まり  
が不満を持っていることを表現するため。

ウ 麻利まりがまだ幼くて、受験やA判定という言葉の意味をよく知  
らずに話していることを表現するため。

エ 麻利まりが早くベッドに入りたいのに太輔たいすけに呼び止められ、眠そ  
うにゆつくり話す様子を表現するため。

オ 麻利まりが太輔たいすけの言葉をさえぎり興奮して話すので、太輔たいすけがうま  
く聞き取れないことを表現するため。

問九

——線E「麻利まりは強くなっている。だからもう、人の嘘うそだっ  
て見抜けるし、自分で嘘うそだつてつける」について、次の各問  
いに答えなさい。

(1) 麻利まりが見抜いたのは、誰だれのどのような嘘うそですか。最も適切な  
ものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 淳也じゆんやが、本当は自分で麻利まりに聞きたいことを、自分では聞  
けないので、太輔たいすけがかわりに聞いてほしいということ。

イ 佐緒里さおりのが、本心では勉強に集中したいと思っっているが、他の  
子どもたちに気をつかっておしゃべりに付き合ったこと。

ウ 朱音あかねが、以前よく遊びに来ていたのは、麻利まりと仲良しだから  
ではなく、ピアノが弾ひきたかっただけということ。

エ 太輔たいすけが、本当は佐緒里さおりのが受験に合格して東京に行つてほしく  
ないと思っっているのに、それを隠かくしていること。

オ 美保子みほこが、模試やA判定について詳しくかったのは、内心では  
自分も東京に行きたいと思っっているからだということ。

(2) 麻利まりはどのような嘘うそを、何のためについたらと考えられますか。  
60字以内で説明しなさい。